

AI時代の手の仕事 —これまでの手仕事とこれからの手仕事—

染色作家
東京造形大学名誉教授
大橋正芳



AIと手仕事

手仕事は、例えば焼き物でしたら、陶工が手で口クロを引きますが、足はロクロを蹴り、目は形を追い、仕事の段取りを考えるなど、手ばかりか全身全霊が働きます。徹夜で窯焚きもしますし、地域の付き合いなどもこなします。例えシンプルな皿一枚でもそこに人の気配を感じる……これが手仕事の魅力なのだと思います。

NHKのEテレ「人間ってナンだ？超AI入門」という番組で、2016年に発表されたAIによるレンブラントの「新作」が紹介されました。それはAIがレンブラントの全作品を分析した画像データを3Dプリントしたもので、AIは、手で直接描いてはいませんでした。いずれ絵を描くロボットや陶工ロボットが登場するとして、そのロボットは近所付き合いもするのでしょうか？AIが人に近づけば近づくほど「人間ってナンだ？」という壁にぶつかる。番組のタイトルにはそのような疑問が含まれていましたが、AIが限りなく人に近づいたとしても、人は手の仕事を続けてゆくよう気がします。

柳宗悦と民芸

私の恩師四本貴資先生（1926-2007）は染色家芹沢鉢介（1895-1984）の高弟の一人でした。芹沢は1956年に型絵染の人間国宝になりますが、その仕事はいわゆる染物に留まらず、なかでも本や雑誌の装幀は一家を成しています。それは柳宗悦（1889-1961）が依頼した雑誌『工藝』（1931-1951、全120号）の表紙を芹沢が型染で制作したことがはじまりで、職人のように同じ仕事を繰り返すこの仕事から芹沢は工芸の基本を学び、後に世界的な作家として大成すること

につながります。

芹沢が生涯の師と仰ぎ、敬愛し続けた柳宗悦は、朝鮮の小さな焼き物から東洋の美を発見。同じ美しさを日本の様々な手仕事に見つけるための調査と収集をはじめます。1925年、その手仕事に「民芸（民衆的工芸）」という言葉を与えて民芸運動を開始。1934年に日本民藝協会を創設、1936年に東京・駒場に日本民藝館を開館。また、1940年前後に全国の手仕事を調査して著作『手仕事の日本』にまとめます。本は戦後の出版でしたが、戦時下の日本各地に残された伝統的な手仕事が網羅されていると言っても過言ではありません。柳はその前書きで、「（前略）欧米の事情に比べますと、日本は遙はるかにまだ手仕事に恵まれた国なのを気附きます。すべてを機械に任せてしまうと、第一に国民的な特色あるものが乏しくなってきます。機械は世界のものを共通にしてしまう傾きがあります。（後略）」と書いています。

1925年に治安維持法が制定。1936年に二・二六事件、翌年に盧溝橋事件が起こります。国中が一つの方向へ突き進む時代に、民芸と名付けた日本の文化を広く共有することが柳の民芸運動でした。自国の文化に目覚めることは、他の国や民族の文化にも目を向けることにつながります。自國第一という言葉が飛び交う今、柳の残した手仕事に学ぶことが少なくないと思います。

木綿の時代

出雲に藍板締と呼ぶ染物がありました。数十枚の板に模様を彫り込み、その型板と型板の間に布を挟んで締め付け、藍に浸けて模様を染め上げるもので、私はその復元に取り組みましたが、特に材料の入手が大変でした。型板のヒメ



目黒区駒場の日本民藝館



雑誌『工藝』(10、11、12号／東京造形大学蔵)



「竹に虎模様藍板締め裂」
(江戸時代後期)

コマツ材は福島県の山中から丸太を手に入れ、国産綿花（和綿）を手紡ぎ手織りにした木綿の布は、福島・昭和村の一人の女性が織り上げてくれました。2006年に復元が完了、2008年、島根県立古代出雲歴史博物館で「よみがえる幻の染色－出雲藍板締めの世界とその系譜」展を開催しました。

江戸中期から木綿が普及すると木綿と相性の良い藍染も広がります。藍板締はこの木綿の時代の藍染ですが、明治とともに廃れます。和綿の生産は明治の半ば頃にピークを迎えます。しかし、明治政府が機械生産に不向きな和綿に見切りをつけ、綿花や綿糸の輸入関税を撤廃したことで明治の末頃には限りなくゼロに近づきます。この時点で日本は農業立国を捨て工業立国に舵を切ったと論じる経済学者もいます。事実、昭和8年にはイギリスを抜いて綿布輸出量世界一の国になり、機械に押されて和綿の手紡、手織は消えました。日本民藝館に残されている美しい紺絣や絞り染は、機械以前の木綿の時代、藍染の時代の手仕事をです。

民芸運動と手仕事フォーラム

柳の民芸運動は、過去の手仕事を集め愛でのではなく、かつての手仕事を手本としてその美しさを学び、時代に合った手仕事を作り、使い、次の時代へ伝えてゆくことが目的です。日本民藝協会はその実践の場であり、日本民藝館は手本の収蔵庫です。

四本先生は晩年、日本民藝協会の専務理事を務めました。理事の一人に久野恵一（1947-2015）という私と同年の人�이いて、彼は大学卒業と同時に手仕事を求めて全国を歩き、作り手と交流を重ね、優れた手仕事を鎌倉に構えた工芸店「もやい工藝」に運びました。また、1989年から協会の活

動として全国手仕事調査を開始。それは戦中に柳が行った手仕事調査の現代版で、その成果は「日本の手仕事展」などに結実しますが、『手仕事の日本』に取り上げられた多くがすでに消えている一方で、柳が知らなかった新たな手仕事の発見もありました。今なお日本の各地で作り続けられている現代の手仕事を多くに人に知らせたい。その思いを実現するために久野は協会の外へ活動を広げ、2002年に手仕事フォーラムを発足します。

手仕事フォーラムは、作り手との交流や産地での学習会などを開き、活動は会報誌やホームページなどで伝え、優れた手仕事を直営店で紹介しています。私はその創設に関わって今に至っていますが、若い会員が多く、AIと共に生きるであろう彼らの時代は、人の手が生み出す手仕事の役割はむしろ大きくなると確信しています。

第195回aacaフォーラム

日時：2019年3月7日

場所：サンゲツ品川ショールーム

大橋正芳（おおはしまさよし）

染色作家

1947年 新潟県新発田市生まれ

1972年 東京造形大学テキスタイルデザイン専攻卒業
同大学で染色を指導

2013年 退職

2018年 東京造形大学 名誉教授



大分・小鹿田焼の陶工・坂本浩二さん（2012）



全国の手仕事が並ぶ鎌倉「もやい工藝」の店内



手仕事フォーラム全国大会
(2018 倉敷市立美術館講堂)